



橋爪大三郎  
東京工業大学教授

# 戦争の効力と テロ抑制の道順

## 日本で徹底討論する

あると同時に、ぐるぐる循環する構造になつていきます。そこからは答えが出てこないというのが僕の考えです。

第一の流れは、共同体の伝統や歴史の中から出てくる善や正しき、規範の観念をそのまま採用し、倫理の基礎とする考え方です。コミュニタリアン（共同体主義者）やナショナリストの思想がこれです。

第二に、第一の流れを特殊な共同体に内属した善の観念であるとして批判し、普遍的な正義を導き出すとする流れがある。ただし、この立場は、正義に具体的な内容を与えようとすると、再び共同体の特殊な善に陥る可能性がある。普遍的な正義を導き出す形式的な手続きを示すことに主眼がある。概してモダニスト（近代主義者）に多く、一番はつきりしているのはアメリカのジョン・ロールズ（正義論）の「す。また、ロールズより抽象度が低いけれど、ドイツのユルゲン・ハーバーマスも、こういう基準を満たす討議から導き出せば普遍的正義



大澤真幸  
京大助教授

# 「9・11」なお重き問い

「9・11」同時多発テロから来月で一年になる。事件の首謀者とされた人間は行方不明、洪水のように交わされた議論も、結着がつかないと言いたい。日本、アメリカ、アラブという三つの地点から、問い直しのための議論を提供したい。まずは、見解を異にする社会学者が交える徹底的なディベート。

## 思想の三幅対 対策出せない 循環構造

大澤 社会学や社会思想をやってきた者として、昨年九月十一日の同時多発テロが浮かび上がらせた問題をどう分析し、どんな積極的提案ができるか。それを考えていったとき、われわれが持っている思想的なカードは無力であると気づきます。

現在の社会思想は、三つの流れに整理できる。その間に相互に否定する関係が

photo 鈴木芳果

### 「9・11」なお重き問い

とみなせるかという条件を、コミュニケーションの理論として提出しました。ところが、第二の流れが言う形式化された正義も、ある種の歴史的な伝統に縛られていて主張するのが第三の流れです。煎じ詰めてしまえば、西欧の伝統にある基本的人間観、規範観を抽象化しているにすぎない、というわけです。こゝういうのはポストモダニスト（脱近代主義者）ですね。彼らは「こうやったら普遍的な正義が出てくる」とは言わず、多様な善の観念、文化が共存する状態を支持する。彼らの政治的・実践的な表現はマルチカルチュラリズム（多文化主義）となり、アメリカの大学ですごく元気があつたりします。

ところが、ポストモダニストは概してコミュニタリアンに回帰しやうい。循環構造ですね。一番はつきりしているのはアメリカのリチャード・ローティで、彼はポストモダンな相対主義者だけれども、「マルチカルチュラリズムは第二の流れにある寛容や民主主義を徹底させただけ

人びとは自分の態度を決める場合には既存の思想のどれかを手がかりにするばかりではない。そこで形式的な循環の構造を示して「三つともだめだ」と述べるだけでは、人びとは当惑してますます行動できなくなつてしまふ。

大澤 いや、この思想の三幅対の範囲内で解決できる問題はある。例えば「脱ダム」問題は、共同体のよき規範に訴えながら解決できるかもしれない。しかし「9・11」やオウム事件では、普通の人びとも三幅対に対して腑に落ちない感覚を持つていると思う。

橋爪 それは正しい。だがまず、この三つがそれぞれ十分にもつともだと受けとめることが大事だ。それで初めて葛藤が起きる。私は、「9・11」以後、秩序を回復するうえで戦争がいかに意味があるかを強調してきました。そう言う人が日本では最も少ないだろうから、バランスを取り戻すためにもそれが大事だと考えたわけだ。

では、なぜ「9・11」のような事件が

起こつたのか。それは、資本主義社会の高度化が根底にある。ネットワークがますます巨大に、相互依存が複雑になるとクモの巣と同じで一本でも糸が切れると全体がべしゃんこになる。「構造的脆弱性」が生まれてくるわけです。これが新たな犯罪を誘発する。

「古事記」に、「天つ罪」「国つ罪」というのがあり。古代から言い伝えられる「天つ罪」の中に「畔放ち」といって、水田の畔を壊してはいけないとなつている。こういう規定があるのだから、人間の不思議なところだけど、わざわざこつそり畔を壊す犯人がいるということ。社会の規範に従うのが面白くない。規範を侵犯することで自己主張するわけだ。水田がなければ、「畔放ち」もなかったが、水田のような人工物ができると、子どもが遊んで崩しただけでも水田一枚がだめになつてしまふ。これが構造的脆弱性なんです。そこでそうならないよう、相互監視が必要になる。

ネットワークができればハッカーがで

とみなせるかという条件を、コミュニケーションの理論として提出しました。ところが、第二の流れが言う形式化された正義も、ある種の歴史的な伝統に縛られていて主張するのが第三の流れです。煎じ詰めてしまえば、西欧の伝統にある基本的人間観、規範観を抽象化しているにすぎない、というわけです。こゝういうのはポストモダニスト（脱近代主義者）ですね。彼らは「こうやったら普遍的な正義が出てくる」とは言わず、多様な善の観念、文化が共存する状態を支持する。彼らの政治的・実践的な表現はマルチカルチュラリズム（多文化主義）となり、アメリカの大学ですごく元気があつたりします。

ところが、ポストモダニストは概してコミュニタリアンに回帰しやうい。循環構造ですね。一番はつきりしているのはアメリカのリチャード・ローティで、彼はポストモダンな相対主義者だけれども、「マルチカルチュラリズムは第二の流れにある寛容や民主主義を徹底させただけ

であり、自分は西欧のエスノ・セントリスト（自文化中心主義者）だ」と居直つてしまふ。

これら三つの社会思想は、どれも「9・11」に対し、戦争以外の有効な解決案を提案できなかった。第一の流れのコミュニタリアンやナショナリストは、単純に戦争を肯定した。第二のモダニストが、理論的には最も大きなダメージを受けた。彼らも、戦争を支持したのですが、彼らの目には、テロリストは形式的正義の中に存在するはずのない、逸脱者だったからです。第三のポストモダニストは最も戦争に批判的だったけれども、テロへの有効な対策を提示していない。橋爪さんの「その先の日本国へ」（勁草書房）の言葉でいえば「テロ相対主義」です。

橋爪さんはおそらくアフガニスタンでの戦争を肯定されるのでしようし、僕もすべての戦争を否定するわけではありませんが、究極的には、戦争だけでは問題は解決しない。戦争は、問題の解決というより解消です。問題を起こした人間を

やつつけても、テロが起きた社会的状況を解決できるわけではない。

橋爪 大澤さんによる思想的整理はなかなか見事で、日本人にとつて受け入れやすいものだと思う。ただ、三つの立場が三すくみ構造になつていて、思想がテロ問題に対して無力であることは独立な問題でね。

大澤 もちろんそのとおりです。

橋爪 三つの思想は、資本主義という運動がしみ出させる現実感覚に基づいて構成されている。そもそもどれもが資本主義という運動の随伴者なのだから、資本主義の問題を解決できる構造になつていないんだ。「9・11」にもオウム事件にも温室効果ガスにも、およそ有効ではない。人びとに規範を与えようと提案している思想がこの三つしかないとしても、

## 社会的脆弱性が 犯罪を誘発

ところが、国外にいる国際テロリストは逮捕できない。テロ支援国家があつて、テロリストに資金や拠拠地を提供し、テロをそそのかしている。

これに対抗するには、少なくとも二つの可能性がある。一つは、隠密ゲリラコマンド部隊を送り込んで、一味を暗殺してしまう。もう一つは、正規軍を動かして戦争という形で対抗措置を講じる。今回、後者を選んでいるんです。これは大澤さんの言うモダニズムかナショナリズムか、要するに近代のメカニズムのつとつて問題を処理・回収しようとしている。正規軍の行動ですから、合法的で、国民は監視できる。

またこれは、国際法によっても、合理化できる話なんです。この作戦は、アフガンスタンの人民を攻撃しているわけではない。あくまでもタリバン政権を目標にし、軍事目標に限定して、制服の軍人が攻撃を行っている。そして周辺諸国や同盟国が反対しないように、支持を取りつける手続きを踏んでいる。これはア

メリカにとつては、自衛の範囲内の行動なのです。

## 戦争という対抗策 不可避だったか 意味はあったか

大澤 確かにアメリカの論理はそういうことでしょう。しかし、「9・11」はそもそも国際法が想定していた事態ではない。だから、それへの対処策も、想定していなかった事態を、無理やり従来の解釈に押し込めようとしているところがある。

橋爪さんの話は要するに、刑法を適用しながら犯罪者を処罰することを、思い切つて国際関係にまで広げてみたわけですね。しかし、国際法は曖昧な慣習法で、究極的には覇権国の行動原理が定着している。覇権国の行動に納得いかない人たちにとつては、国際法は説得力のある論拠にならない。そういう意味で、警察力の国際的連帯による集団安全保障体制にも限界がある。一時的にはテロリストを

威嚇したり、慎重にさせたりするでしょうが、覇権国の行動への根本的な不満は解消しないからです。

しかも、刑法の適用は、犯罪者といえどもどこかで僕らと同じ論理に従っていることが前提です。自爆テロすら恐れない犯罪者は、セキュリティの強化は言うに及ばず、空爆だつて怖くもなるとも。戦争に威嚇されて犯罪をやめるのは、向こう側にこちらと同じ種類の合理性や利害の観念がある場合です。しかし、向こう側には橋爪さんが指摘されたように、僕らが普通持っている信念体系から見ればハチャメチャに見えても、それなりに一貫性を持った体系がある。そうした人には、刑法は無効です。

橋爪 私が言いたいのは、戦争をしなかつた場合の危険のほうがはるかに大きいということ。だから、戦争はすべきだったのです。戦争の不可避性を、もう少し考えてみるべきじゃないか。

半世紀あまり前、日本はアメリカに戦争を仕掛けた。アメリカは「9・11」で

## アメリカの手法 対日戦争と 今回との差異

大澤 戦争が短期的にもいい選択肢だったかどうか疑問があります。アメリカの軍事行動は、テロリストの予想どおりのものです。アメリカの視点からは理にかなつた行動かもしれないけど、向こうから見れば、まさに、それこそがアメリカ

「悪の図式を裏づける」ものです。僕はテロリストを除去するには、テロリストにとつて最も裏切りになる行為をすべきだと思つていて、それこそ、昨年十一月の「論座」や「文明の内なる衝突」(NHKブックス)にも書きましたけれど、大規模な経済援助、贈与ですね。それを実行したら、テロリストへの大衆的な理解や支持が一挙に失われる。アメリカが迫害者であり、悪であるという、テロリストの基本前提が失われるからです。テロリストも孤立してしまえば怖くはな

ずなんです。でもこれが再び無意識に抑圧されて、憲法九条になつた。

アメリカは対抗的な自衛戦争で、大成功を取つた。世界もそれによつて救われた。その後、アメリカは「世界の警察官」としてふるまい始め、朝鮮戦争、ベトナム戦争、湾岸戦争と、いくつかの成功と失敗を繰り返した。湾岸戦争は、いちばん成功したかな。また、冷戦に対する勝利も大きな成功だった。

私の理解では、現在は正規軍による国際秩序への脅威はほとんどなくなり、かわりに、治安のよくない第三世界を背景にした、非正規軍によるテロ攻撃が浮上してきたと、アメリカは認識したんです。よ、「9・11」の前に、そういう予想どおりのテロが起こつたから、反撃戦争をして、これ以上のテロがないように抑止しようとなつた。これが、アメリカ側から見た現実だと思つて、相手がイスラムであらうとなかろうと関係ない。ただ、この抑止が、この先動きがあらうかどうかはまだわからない。

あ戦争でアメリカが排除しようとしたのは、日本の政権、そしてそれを支えたイデオロギー、挑戦の可能性でしょう。日本が一体何に挑戦したのかは、われわれの無意識だからよくわからないが、ともかく徹底的に排除された。そして、それは日本人にとつても恩恵だつた。こうして、対抗的な自衛戦争は道義的に正しいという原則を、日本人は肝に銘じたは

い。しかし、ある種の人たちの集合的なメンタリティの表現になつていて、時には、非常に怖い。

戦争という選択肢をどこかに確保しておくという橋爪さんの論理はわかりませんが、仮に橋爪さんの論理にのつたとしても、少なくともその先が必要じゃないか。

橋爪 問題はケース・バイ・ケースです。日本の占領とその後を考えてみると、アメリカはまず第一段階で、容赦のない軍事的行動で、日本の戦争能力を失わせ、無条件降伏を引き出した。あとで政府の指導者も含むことになる、戦争犯罪人の処罰をのませ、日本を保障占領した。その次に、大澤さんのギフト作戦によく似た作戦を展開したわけですね。余剰農産物を配つたり。しかも、戦争が三年八カ月にも及んで日本研究が進んだことを背景に、心理学や社会科学を動員し、メディアもコントロールした。ギフトと心理作戦で反米行動を抑え込んで、アメリカの国益と世界戦略に奉仕する国民をつくり

はつづめ だいさぶろう 一九四八年生まれ。東京大学大学院博士社会学研究科修士。著書に「政治の教室」「世界がわかる宗教社会学入門」(選訳)責任・連帯の教育改革(共著)など。



出す。これはどれくらい成功したと思いますか。

大澤 ある意味では非常な成功でしょう。ただ、現時点での評価は難しい。成功しすぎたために、逆に、いま僕らは戦後五十年以上たつて、戦争(太平洋、大東亜戦争)という事実に向つてどう対処するか、あるいは戦争中、戦前との間にどういう連

続性、アイデンティティをうち立てたらしいか、迷つている。

橋爪 私も大体同じ評価です。だけどそれは飢え死にしたり、もう一回戦争を起こしてひどいことになつたりするのに比べれば、だいぶましです。贅沢な悩みなんです。

アメリカはすぐ戦争をするが、心理作戦について全くはずばらで、何も無い国かというところではない。アフガニスタンやイスラムに関して、アメリカがなんでそんなにナイーブで何も考えていないのかは、別に考えたほうがいい。おそらく日本が相手の場合、軍事的に強力だつたし、四年近くも戦つたから、アメリカは真剣に考えたんだろうと思う。今回はそこまで真剣に考えている気がしないんです。

大澤 だから一番手解な解決は、ハンチントンのように「文明の衝突」と言つて、イスラム理解をお手上げにしてしまつたことです。アメリカや西欧文明にとつて、日本も異質でストレンジャーであること

もう少しこのテロの根本、アメリカの構造的脆弱性を考えてみないといけない。アメリカがなぜ狙われ、世界からうとまれ、イスラム教徒の憎悪的になるか。それはアメリカが強大で、ハイテクで、世界の中心であり、文明の象徴だからでしょう。では、アメリカのそれだけの豊かさやハイテクと、アメリカ的生活様式

贈与をめぐって  
基本的論理を  
組みかえる

橋爪 一神教の対極にある日本や中国の文化を翻訳するほうがずっと困難で、イスラム文明ならちよつと努力すればわかるはずだ。



大澤さんのギフト作戦は、アイデアとしては面白いが、ちよつとテロリスト中心の発想だな。アメリカではそういう発想にならない。「無用の慈悲はかえつて害悪になる」とクリスチャンは考える。「神は自ら助くる者を助く」であつて、相手の側も主体的に努力するからこそ手を差しのべるわけだ。

おささわ まさち 一九五八年生まれ。東京大学大学院博士社会学研究科修士。著書に「見たくない思想的現実を見る」(共著)「虚構の時代の果て」「行為の代数学」など。

が世界大に拡大できるか。世界の五%の人間がエネルギーの四割を使つているわけだから、地球環境の制約もあり、世界はアメリカにはなれない。というところは、アメリカの存在は世界の残りの部分の発展を抑止しているとも言える。採取とは言えないけど、要するに邪魔者なんです。アメリカの存在自身が、アメリカの構造的脆弱性をつくり出している。しかし、アメリカは世界で最も強大だから、世界秩序はアメリカによつて担われなければいけない。こういう奇妙な構造が、あと数十年は続くだろう。今回は、非アメリカ的なものがテロでアメリカの中核を攻撃し、アメリカが武力を発動して国際秩序を維持したという端的な例ですが、構造自身は温存されている。これはアメリカがテロリスト国家にギフトをしたくらいでは解決しないんです。大澤さんの議論を敷衍するなら、テロリストを根絶する道は、アメリカが自己解体的に、自らの文明の構造を脱構築することなんです。これは非常にむずかしいことだ。

ある。ギフトがうまく使われて効果をあげること、ありうると思うんだが、日本人が本当に議論すべきところはもう少しほかにあるんじゃないか。

大澤 国際関係を小さな人間関係レベルで成り立つ論理との関係で考えていいかどうかは、僕も最初疑問に思っていました。けれども、冷戦以降、国際関係を国民国家間の力学として描くことができなくなってきたから、状況が一変して、大きな国際関係に人間関係のような愛情や憎悪の論理が短絡的に直結するようになったと思うのです。

それから、贈与が暴力を誘発するんじゃないかという疑念については、暴力は、行使者にとつてもたいへんな犠牲を強いられることを考えないといけない。自分だつて死ぬかもしれない。ギフト作戦をやれば、それほどの犠牲を払って暴力を發動する理由がなくなる。それに、暴力を加えたら儲かったというのは、まだ交換の論理です。ただ、向こうはすでに交換の論理を超えている。自爆という対価が不可能な犠牲を払っているの

アメリカはその主宰者になる。他の主権国家は共同行動者になる、というかたちで再編されるだろう。これであと二十年ぐらいは何とかなる。でもその後は、非欧米的な世界の経済力が、世界の半分を超えてしまうので、システムの再定義が求められるだろう。

大澤 システムの外部にテロリストや過激な原理主義者がいるならまだなんとかなると思いますが、それらはシステム内部の混乱や矛盾を表現しているにすぎないかもしれない。同じことを最初に実感をもったのは、オウム事件のときです。僕はオウムの中心的な世代とはほぼ同じ年です。僕は、自分がオウムの現象の一部であると痛烈に感じた。もちろん単純に「オウム」と「非オウム」に分ければ、僕は「非オウム」ですが、オウムは自分のなかにありうる現象を誇張して外化しただけという印象を強くもった。セキュリティの問題は非常にむずかしい。国際テロリストは実は国内にいつばいるわけです。しかも、それに共感

してしまうような市民もいたりする。誰がテロリストだと書いてあるわけでもない。セキュリティは本来、民主主義な自由を守るために、敵の侵入を防ぐ外堀を掘っておく作戦なんだけれども、それが排除すべきテロリストが、民主主義を保持するシステムの内在的な困難の表現であるとしたら、セキュリティはいくらでも強化されることになる。ついには、通常の民主主義と非常事態的な対応の線引きがはっきりしなくなる。ここまで行くのではない。

けど、論理的に考えて、これしかない。大澤 最後の結論は全く賛成です。おっしゃる通りに、アメリカ自身を脱構築しなければいけない。しかし、ギフトの問題は、まさにその点にこそかかわっているのです。橋爪さんがおっしゃっているポイントこそ重要なところなんです。ギフト作戦はアメリカの基本的な正義感に反するから、なかなか受け入れられないでしょう。でも、今、僕らはほとんど共通の合意点がない敵と対峙しているということに留意しなくてはならない。こうした相手とかかわるためには、相手の根本的な変化を誘発しなくてはならない。そうした変化は、こちらと同じように根本的に変容した場合のみ、引き起こされるでしょう。つまり、僕らは、僕ら自身の基本的な論理に反することをやらなくてはなりません。それをギフトということに集約させてみたのです。

つまり、僕らの社会システムをつくっている基本的な論理を変えることです。その社会システムとは、要するに資本主義です。その内部の関係を規制する基本的な原理は、交換の原理です。その原理を脱構築することが必要だ。ところで、資本主義は交換の体系ですが、よく見ると、そこには、究極的には交換に解消できない部分がある。資本主義の起源でもあるキリスト教にまでさかのぼって見れば、その道徳的な部分とは、原罪の観念です。原罪とは、具体的に悪いことをする前に悪いということであり、初めから負債を負っているということ。それを担保しながら公正——交換における公正——の感覚をつくらせていくのがキリスト教の論理です。だとすると、これは、この原初的な負債（原罪）の観念とは逆方向に交換の論理を乗り越えることもできるのではない。逆方向とは、根源的な贈与の論理です。

本場に重要なのは、個々の援助活動よりも、どこかに贈与を根本的に組み込んだ新しい関係の模式をつくること。それが、交換の論理を機軸におくアメリカ的な資本主義を脱構築することになる。何もないときにこういうことを訴えても、ほとんど空理空論として退けられる。しかし、「9・11」テロのようなショックと危機意識のあるときだったら何がしかの説得力を持ちうるでしょう。

域に属する構造的な問題がある。普遍性が不可能だということ、アメリカの利己的な行動自身が証明してしまっているわけです。「京都議定書」よりもさらに直接に市場経済にかかわることは、ワールドコムやエンロンの疑惑です。それは、市場を支配する普遍的なルールに対する信頼を著しく下げます。粉飾決算は、個人的な悪さのように聞こえるけど、もっと大きな意味がある。金本位制下では、金こそが市場への信頼の究極的な担保になっていた。現在、金に代わって、われわれの信頼の手がかりとなる準拠は、企業の会計以外にない。企業の会計を見ながら、僕は投資したり株を買ったりしているわけですから、それに対する信頼の喪失は、金本位制の終焉に匹敵する、市場への信頼の崩壊につながりうると思うのです。

大澤 問題は、ある国が非常にセルフフィッシュだということではなくて、みんなが共通に分け持っているルールに対する信頼がないことです。つまり、普遍的な信頼にたるニュートラルなポジションからかです。

現在進行している市場システムの高度化は、必然的に、テロの可能性を高めていく。テロを共同で排除する共同利害、市場の参加者に分け持たれるようになる。

### 縮減している 普遍性への信頼

橋爪 ギフトによって自分が変わり相手も変わるといふ考え方は、対人関係か、せいぜい人類学が扱う共同体間の力学には応用できるが、それを二十一世紀の国際社会に持ち込むのはかなり乱暴ではないか。それに、市場経済は基本的に交換の上で成立しているから、そこにギフトを持ち込んでも、まず市場で利益を収め、それをばらまくかたちにならざるを得ない。ギフトを行うには、交換が主導である市場をまず前提にせざるを得ないんです。テロが起こるたびにギフトを贈るといふ作戦が、暴力を誘発する心配も

### 外部ではなく 内部からテロ

橋爪 大澤さんの言うとおりでしたら、むしろ話は簡単です。世界大に拡大した市場の要求するモラル、秩序と、個別アメリカ国家の特殊利害が矛盾しているというだけの問題であれば、それなら、市場に参加する多数の国々の代表する市場の合理性が、アメリカの特殊性に打ち勝ち、それをアメリカに認めさせる制度的枠組みをつくっていけばいい。当然、アメリカは反対するでしょうけれども、長い趨勢から見れば、そういうものができ上がる構造になっていることも割合に明らかです。

### 言葉のないテロ こちらの反感 あちらの共感

橋爪 結局、セキュリティは、自己検閲の問題になるんです。自分たちで自分たちをモニターする。それがどこまでが公共的で、どこからが自由とプライバシーの侵害か。万全のセキュリティを確保しようと思えば、プライバシーがなく

は生き残るのではないだろうか。

大澤 今回のテロリストは何の目的で誰がやったか。「犯行声明」もなければ「目的」についても言っていない。そういう意味で言葉がない。しかし、共感を呼ばなかったかといえ、そうではない。僕らはこちらの世界にいるから、共感の範囲を狭く感じますけれども、これがイスラム圏にいれば、共感に近いものを持っている人ははるかに多い。ですから言葉にならなくても共感を呼ぶことはあるわけです。

民主主義は、基本的には議論です。「暴力に訴えずに言葉で言ってくれよ」ということです。しかし、社会的・構造的な原因で言葉による表現から疎外される人たちがいる。それは頭が悪いとか、言語能力が足りないということではない。スビヴァクというインド系のアメリカ人学者が有名にした「サバルタン」(抑圧されている人)が一例です。インドには、寡婦が夫の後を追って殉死するという風習があり、インドを植民地にしたイギリス

人は、野蛮な制度だからとやめさせた。しかし、「西欧的な人権思想を押しつけるな」というナショナリストもいる。「イギリス人が野蛮な現地人の男から寡婦を救った」という言明も、「寡婦は本当に殉死を望んでいた」という言明も、寡婦の立場からするとしっくりいかない。自分が表現されていると思えない。言説の領域から構造的な理由で排除されている人は、暴力、テロによる表現の回路しかもないことになり得る。彼らも含めて民主主義を考える時には、構造的な原因を除去しなければいけない。

橋爪 すべてのことを語りうるなんて、私が思っているはずがないでしょう。言葉は、語りうることを語るだけなんです。でも何が語りうるかは、語ってみて初めてわかる。語れるはずのことが語れないのは、サバルタンだけではなく、誰もが置かれている状況なんです。で、そんな状況に置かれると、暴力やテロに訴えるしかないんだって？

大澤 可能性はありますよね。

橋爪 誰がどうやって証明したんですか。本当にそう思うの？

### 言葉のない人々 表現の道を どう開くか

大澤 少なくとも今回のテロにおいて、たいした思想は表明されていない。にもかかわらず、共感の波紋を呼んだ。僕は橋爪さんのおっしゃっていることにほとんど賛成なんだけど、もう一本、補助線が要る、論点を付加したいということなんです。

橋爪 論点を付加する方法が問題ですよ。誰かが、自分は言葉を持たない膨大な民衆の代弁者ですと主張すれば、必ず無責任な思想になる。何だって言える。テロやゲリラを肯定し、奨励する可能性さえある。それが有効な補助線になるんですか。大澤 いや、だから、言葉による表現から疎外された膨大な人々を放置し、見捨てるのがリスクだといいたいわけ

す。そのとき、必ず、その表現できない何かを表現すると称する——あるいは見なされる——輩が出てくるからです。だから、僕らがやらなければいけないことは、言語表現から構造的に排除されている人たちに対して、積極的な表現の道を開くということですね。それがどうやったらできるか。

橋爪 そこは戦線が入り乱れているなあ。言葉は制度をつくるものなんです。大事なのは言葉で制度をつくること、言葉にならないものの場所をちゃんと用意しておくことだ。

——最後にもう一度、「9・11」とアフガニスタンでの戦争の評価をお願いします。

橋爪 国際法として「テロに抵抗して戦争を起す」という先例になったわけですから、その意味では成功ですね。日本にとっては、「外国が日本にテロ攻撃を仕掛けたら自衛戦争で対抗していい」というコララー(推論系列)が得られた。セキユリティーのために、よかつたんじゃないですか。

大澤 僕の評価は違いますね。先ほど言ったように、戦争という対抗策の効果に疑問を持っています。それに、ごく素朴に言ってもこの戦争は犯罪者を捕らえてこそ最低限の成功になるはずですが、依然として捕まえていない。戦争はある国家をぶつぶすにはそれなりの効果を

あげるけれども、犯罪者をピンポイントで狙うには非常に無力であることが逆にわかってしまった。テロリストからすれば、うまくやれば逃げおおせる、という教訓を残してしまっただけです。もう少し長い目で見ないとわかりませんが、僕は現状ではあまりよい策ではなかったと思います。

ただ、強いていえば、これは完全な副産物ですが、アフガニスタンに対して僕らの目が向き、そこに、見捨てていたことすら忘れていた人たちがいたことを知った。これは僕らがものを考えるうえでよかつたとは思わう。ただ、それを初めから狙っていたわけではありません。

**古いものが、  
恥ずかしいですか。**



佐藤の伝説であるたらい舟づくりを唯一受け継いだ  
宗匠人、ダグラス・ブルックスさん(42歳)

**たらい舟の復活**  
日本最後のたらい舟職人といわれた藤井孝一さんの死後、その技を唯一受け継いだダグラスさんを佐藤に招き、たらい舟づくりを公開していただきました。日本財団は木造船建造技術の保存、伝承に取り組んでいます。  
新潟県立歴史博物館 0258-47-6130

**日本財団**  
The Nippon Foundation  
日本財団は、世界の平和と発展のために活動しています。  
http://www.nippon-foundation.or.jp/